

平成30年度 第1回
北海道立総合博物館協議会

議事録

日時：平成30年6月8日（金） 13時30分開会

場所：北海道博物館 講堂

平成 30 年度 第 1 回北海道立総合博物館協議会議事録

| | |
|-------|--|
| 会議名 | 平成 30 年度 第 1 回北海道立総合博物館協議会 |
| 開催日時 | 平成 30 年 6 月 8 日（金） 13 時 30 分～15 時 00 分 |
| 開催場所 | 北海道博物館 講堂 |
| 出席委員数 | 出席 6 名、欠席 1 名 |
| 傍聴者 | 0 名 |

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

目 次

| | | |
|---|--|----|
| 1 | 開会..... | 1 |
| 2 | 館長あいさつ..... | 1 |
| | 《資料確認》..... | 1 |
| | 《出席状況確認》..... | 2 |
| | 《出席者紹介》..... | 2 |
| | 《会議の公開について》..... | 2 |
| | 《会長あいさつ》..... | 2 |
| 3 | 議題 | |
| | 議題（1）報告事項 1 平成 30 年度北海道博物館事業実施計画..... | 3 |
| | 《質疑応答 1 道民参加型組織について》..... | 3 |
| | 《質疑応答 2 広報について》..... | 5 |
| | 《質疑応答 3 資料の収集・公開について》..... | 5 |
| | 《質疑応答 4 研究紀要のリポジトリ化について》..... | 6 |
| | 《質疑応答 5 アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』について》..... | 7 |
| | 《質疑応答 6 資料数について》..... | 7 |
| | 《意見 1 研究紀要のリポジトリ化について》..... | 8 |
| | 議題（2）報告事項 2 百年記念施設の継承と活用について..... | 8 |
| | 《意見 1 これまでの総括について（1）》..... | 9 |
| | 《質問 1 協議会での議論について》..... | 9 |
| | 《意見 2 「再生」「活発化」に向けた提案（1）》..... | 9 |
| | 《意見 3 「再生」「活発化」に向けた提案（2）》..... | 10 |
| | 《意見 4 これまでの総括について（2）》..... | 10 |
| | 《意見 5 歴史観の総括について（1）》..... | 10 |
| | 《意見 6 これまでの総括について（3）》..... | 11 |
| | 《意見 7 歴史観の総括について（2）》..... | 11 |

| | |
|---|----|
| 《質問2 世論調査について》..... | 11 |
| 《意見8 歴史観の総括について（3）》..... | 11 |
| 《意見9 「再生」「活発化」に向けた提案（2）》..... | 12 |
| 《意見10 これまでの総括について》..... | 13 |
| 《意見11 歴史観の総括について》..... | 13 |
| 議題（3） 報告事項3 平成30年度北海道立総合博物館協議会スケジュール..... | 14 |
| 4 その他..... | 14 |
| 5 閉会..... | 14 |

1 開会

右代学芸主幹: それでは、平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会を開催いたします。開催にあたり、石森館長より、ご挨拶をお願いいたします。

2 館長あいさつ

石森館長: 皆様、こんにちは。本日、ご多用のなかを、ご参集たまわりまして、本当にありがとうございます。

昨年度の 3 月に博物館協議会を開催させていただきましたが、続きましての 6 月の開催となりました。北海道博物館も今年度、4 年度目に入りまして、6 月末から約 2 か月の予定で、特別展の「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎」を開催します。その準備を今、着々と整えているところでございます。

普段は、平日ですと、120 人ぐらいの来館者の日もございます。昨日は、たとえば金沢西高等学校の団体にお入りいただいたということで、864 人の入館がありました。

本日最初に、新年度で、少し喜ばしいニュースがございますので、お伝えさせていただきたいと思います。ひとつは、山中副館長に着任いただきました。私が館長になりまして、4 人目の副館長であります。非常に優秀な方に、副館長になっていただいたことを、たいへん喜んでおります。それからもうひとつ、4 月に 3 人、20 代の学芸員が着任しました。3 人とも、現在 24 歳で、非常に若い戦力が加わりました。皆様にご紹介したいと思います。

鈴木学芸員: 博物館資料学で採用になりました、鈴木あすみと申します。帯広畜産大学の出身です。よろしく申し上げます。

亀丸学芸員: アイヌ文化研究グループに採用となった亀丸由紀子と申します。弘前大学を卒業しまして、現在、北海道大学大学院の修士課程 2 年次に在籍中です。どうぞよろしく申し上げます。

鈴木研究職員: 博物館研究グループで採用になりました鈴木明世と申します。早稲田大学大学院を修了して、建築史を学んでおりました。こちらでも建築史を担当いたします。よろしく申し上げます。

石森館長: 3 人とも奇しくも 24 歳です。非常に若々しいスタッフも加わり、優秀な副館長も加わっていただきましたので、協議会でいろいろご議論いただいておりますことを、少しでも、よりよい形で実現するように、努力してまいりますので、本日もよろしく、ご議論たまわりますように、お願いを申し上げます。ありがとうございます。

《資料確認》

右代学芸主幹: それでは、資料の確認をしたいと思います。

〈以下、配布資料について確認〉

《出席状況確認》

右代学芸主幹：出席状況の確認でございますが、今回は竹垣委員が欠席で、7名中6名の委員が出席しております。協議会の開催条件の2分の1以上の出席ということで、開催条件を満たしておりますので、ご報告いたします。

《出席者紹介》

右代学芸主幹：委員の紹介ですが、2期目にあたり、今回は協議会の委員について変更はございませんので、紹介を省略させていただきます。今回、本庁の職員で協議会に初めて出席する者もおりますので、ご紹介をさせていただきます。

北海道環境生活部文化局文化振興課 佐藤主幹でございます。

佐藤主幹：佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：同じく文化振興課 今主査でございます。

今主査：今です。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：環境生活部アイヌ政策推進局アイヌ政策課 栗原主幹です。

栗原主幹：栗原でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：先ほども皆様にご挨拶したかと思いますが、山中副館長でございます。

山中副館長：改めまして、山中でございます。よろしくお願いいたします。

《会議の公開について》

右代学芸主幹：今回の協議会も、道の情報公開条例に基づいて、公開とさせていただきます。これからの進行については、大原会長にお願いして、進めていただきたいと思います。よろしくどうぞお願いいたします。

《会長あいさつ》

大原会長：皆様、こんにちは、大原でございます。開会にあたり、ひとことご挨拶申し上げます。今日の議題は3件となっておりますけれども、今お話がありましたように、先に事業実施計画がありまして、これが、これから1年間のお話。それからもうひとつが「百年記念施設の継承と活用」で、これは50年先まで見越した形と伺っております。ですので、これから「1年」の平成30年度の分と、「50年先」のいろいろの、ご報告を受けて、私たちが意見を出させていただくということでございます。

5月14日に文部科学省の中央教育審議会から、今までほとんど教育委員会にあった博物館を、首長部局に移したほうがいいという意見が出たと伺っています。これは、博物館・図書館を教育施設から「稼げる施設」へ変えたいという、文部科学省の諮問機関の意見です。ですので、国としても、かなり博物館・図書館を変えたい、あるいは注目したいという動きになっているのではないかと思います。ただ、長く博物館にいた人間としては、教育施設にずっといましたので、これが本当に「稼げる施設」になっていいのかとも思っております。

今日、ご報告を受けるのは、今年の活動と、30年先、50年先を見越してのお話ですので、全国の流れも踏まえながら、北海道として、これから50年先の北海道の文化施設をどう考えるかということになると思いますので、ぜひとも委員の先生方には忌憚ないご意見と議論をよろしく願いいたします。

3 議題

大原会長：本日の議題は3件でございます。終了の時間は、おおむね15時半を予定しておりますので、円滑な議事進行によりお願いいたします。それでは議事に参りたいと思います。

議題（1） 報告事項1 平成30年度北海道博物館事業実施計画

大原会長：報告事項1「平成30年度北海道博物館事業実施計画」です。事務局からご説明をお願いいたします。

右代学芸主幹：資料2を見ていただきたいと思います。

〈以下、配布資料2に基づいて、北海道博物館事業実施計画について舟山学芸部長より、アイヌ民族文化研究センター事業実施計画について小川学芸副館長兼アイヌ民族文化研究センター長より、予算概要について川田総務部長より説明〉

大原会長：ありがとうございます。それでは、博物館全体とアイヌ民族文化研究センターと、予算関係の3点ですけれども、ご意見等ございましたら、お願いいたします。

〈質疑応答1 道民参加型組織について〉

宇佐美委員：前回、私どもがいろいろご意見を述べさせていただいたところについてはお汲み取りいただきまして、さらに充実した計画を作ってください、感謝しております。たいへん期待したいと思っています。

そのなかで1点、私がいつも質問しているところで、7ページの「道民参加型組織の整備」ですが、これについては長年、私どももかなり要望してきて、期待するところが大きいところなので、もう少し詳しく説明していただきたいと思います。資料に書いてありますが、ミュージアムパートナー事業について、具体的に、どこまでどのように今年進めるのか。しかも、今後、将来的にはどんなふうにするのか、ということも含めて、もう一度、説明していただきたいと思います。先ほどの事業実施計画の報告で、図書館支援員のお話はありましたけれど、それは、2つめの「ボランティア組織」等との関わりかだと思います。それも含めて、このミュージアムパートナー事業についてご説明いただければと思います。

右代学芸主幹：道民参加型の事業につきましては、展示など様々なところは進んでおりますが、ただ組織化には至っておりません。本来であれば、昨年度に組織ができて、今年度には動いているところだったわけですが、それがなかなか実施できませんでした。前回の協議会

でも報告しておりますが、年度内には、ある程度は組織が動く形で進めたいと考えております。どういうパートナー事業が進んでいるかですけれど、これはたとえば歴史研究グループやアイヌ文化研究グループなどの研究グループがございまして、そこの学芸員が中心になって、パートナーを募集いたしまして、そこで座学をやったり、資料の整理をしたり、「何々を作ってみたい」だったり、そういったパートナー自身から出てくる意見を尊重しながら、各研究グループで組織したパートナーグループを運営していく形になるかと思っております。さらに、このパートナーから代表を募って、博物館の様々な道民活動、あるいは博物館の運営等の意見をいただきながら、館長に意見を発信していく場になればいいかと考えております。間もなく、募集をかけながら、年度内には、ある程度の実施を進めていければと思っております。

大原会長：具体的に、館の職員に、このパートナーと言いますか、ボランティアの責任担当者、いわゆる「ボランティア・コーディネーター」にあたる方が、いらっしゃるのですか？

右代学芸主幹：「ボランティアであれば、本当に参加型になるのかどうか」ということで、ボランティアという形を取るのかどうかがありますけれど、それぞれの研究グループで代表となる学芸員がひとりふたり、サポートしながら運営していく形になるかと思っております。そして、歴史の文書を読んだり、考古資料を勉強したり、アイヌ語を勉強したりという、いろいろなサークルができると思っております。そのなかで、さまざまなモノ・資料に触れたり、資料の整理に携わったりという形で、活動をパートナー自身でつくりあげていき、学芸員が指導をしながら進めていく組織にしていきたいと考えております。

大原会長：たぶん、湯浅先生のほうがお詳しいと思うのですがけれども、職員はコントロールが利きますけれども、ボランティアなど少し第三者的に入って来る方たちは、組織的に難しいところがあって、いろいろな方たちが入って来ると、そういった担当者を置かないと難しくなってくると思っております。それこそガバナンスかもしれませんけれども。

右代学芸主幹：担当は、企画グループが窓口・中心になって、さらにそれぞれの研究グループの各学芸員が実質的にサポートするという連携の中で進めていく形になります。

湯浅委員：宇佐美先生が仰いましたように、いろいろ私たちの意見を汲み取っていただいて、ありがとうございます。

今のミュージアムパートナーの件なのですが、大原先生と私がおります、北海道大学総合博物館もボランティアを組織しております。2002年度からスタートしておりまして、今220名近くボランティアさんが、標本整理や展示解説、アウトリーチなど様々な活動をしてくださっているのですが、各グループの担当教員がおりまして、なおかつマネジメント全体は私が担当し、それから、非常に優秀な事務スタッフの方が付いていてくださいます。そういう体制で、ようやくできています。そういうところがあるので、博物館の応援団になる反面、ビジョンと一緒に抱えて行かないと難しくなる部分もあるので、やはり慎重になさるのがいいのかと思っております。

《質疑応答2 広報について》

湯浅委員：広報などにも関連するのですが、本当に素晴らしい活動をなさっていて、広報をするときに、「こんな展示をします」「こんなイベントをします」だけではなくて、素晴らしい館長をはじめ、職員の方の個性が出るような、「人」が出るようなアプローチをしてはどうかと思います。「こういう方が、こういう研究をしていて、こんな展示を作りました」や、さらにはその展示を見たり、博物館の活動に参加されたりした来館者の、「こんな素晴らしいことが起こりました」というような来館者にとっての変化や成果が表れるようなことが、たとえばこのミュージアムパートナーでどんどん出てくるのではないかと思いますので、職員の方々の成果プラス、ここに関わった、パートナーや来館者の方々の成果を発信していくと、「ここに自分も関わっていきたい」という方が増えるのではないかと思います。

右代学芸主幹：ありがとうございます。

《質疑応答3 資料の収集・公開について》

佐々木委員：北海道博物館には、国立アイヌ民族博物館準備室といたしましても、ネットワーク準備会等、さまざまご協力をいただいております。たいへん感謝しております。小川学芸副館長には、ネットワーク準備会では中心的なとりまとめまで行っていただいております。これからも北海道博物館とは、協力関係を強固にしていきたいと考えております。

今年度の事業実施計画に関しまして、少し気になる点を、質問させていただきます。まず1ページ目の「資料収集」についてですが、昨今の財政事情では、新たな資料を集めるのは、購入など非常に難しいと思います。受入資料件数の目標「300件」に関して、この新しく受け入れた資料をどういう形で公開する予定でいらっしゃるのか。新しく受け入れるわけですから、何らかの形で、道民の皆様に「こういうものを受け入れました」と披露していく必要があるわけですが、どういった形で披露していく予定なのかを、お聞きしたいということがひとつです。

舟山学芸部長：資料の受け入れ件数「300件」ですが、残念ながら、私どもの館で購入費というのはございません。寄贈希望の情報を受けたものを収集してくるという形でございます。収集するにあたっては、これが大前提になっているというはお恥ずかしい話でもありますが、狭隘施設なものですから「スペースがあるのか」といったところ、それから「どのように活用可能なのか」という活用を見越して、資料審査会を設けて、そこで受け入れの可否を審議してございます。

公表については、新着資料紹介をできるものについては、させていただきます。たとえば、弥永北海道博物館から寄贈いただいた資料については展示会「弥永コレクション」を開催しましたし、それにかかわる資料紹介を目録として発行するなどしてございます。先ほど、事業実施計画内で、企画テーマ展「野幌森林公園いきもの図鑑」についてご報告いたしましたけれども、「野幌森林公園植物調査の会」の皆様が、調査の際に採集した資料を寄贈いただいたということを活かして、この展示会につなげてございますし、基本的には、活用

を見越した収集をしてきております。

小川学芸副館長：アイヌ民族文化研究センターでは、研究紀要に「新着資料紹介」をシリーズ化し、新規に受け入れた資料につきましては、必ずそこで一部でも紹介するという形を制度化しております。また、道内の博物館で、「新着資料展」を定期的で開催しているところも多いですので、舟山学芸部長から話がありましたとおり、北海道博物館も、「新しく受け入れた資料は職員だけが知っている」という状態は、やはり早くに解消したほうが良いと思っております。先ほどの「弥永コレクション」もそうですし、今年予定している「リンゴ農家の道具たち」という企画展も、「昨年度、寄贈を受けた資料をいち早くご紹介したい」という担当者のたつての希望で成立した展示ですので、何らかの形での紹介には努めてまいりたいと考えております。

《質疑応答 4 研究紀要のリポジトリ化について》

佐々木委員：資料 11 ページ目の「研究成果の発信と社会貢献」というところです。『北海道博物館研究紀要』にしても、それから『アイヌ民族文化研究センター研究紀要』にしても、昨今非常にレベルの高い、いい論文が出てまして、私ども、非常に活用させていただいております。非常に、いいものが出ていまして、しかもウェブで公開され、利便性も高くなっているわけですが、こういったものをリポジトリの形で、研究成果・個々の研究としてストックしておいて、常時それを検索して、外からでも利用できる形にする予定があるのかどうか。そうしていただくと、非常に使いやすい。しかも、過去の論稿までさかのぼっていただくと、研究する側にとっては、非常に使いやすいサイトになってきます。そういったご計画があるのかどうか、お聞きしたいと思います。

舟山学芸部長：研究成果の発信は、紙ベースで発行して販売するという流れも必要かと思えますけれども、早期のインターネット上での公開は必要だと思います。これについては研究紀要の第 3 号から、即時、インターネット上での公開という形になっておりますが、旧開拓記念館、旧道立アイヌ民族文化研究センターを含めて、旧機関で発行したものについても、随時、そのような公開を図れるよう、考えていきたいところでございます。

小川学芸副館長：学術論文のリポジトリにつきましては、研究紀要を PDF ファイルにして、インターネット上でご覧いただけるところまでは、すでに組み込んでおります。既存の予算でも、そこはやっていけると見ておりますけれども、リポジトリという、もう少し検索しやすく、出てきたときに使いやすい形については、もう一押し、インターネット上で細工が必要です。大学ですと「リポジトリをやるための予算」が付くようですが、北海道博物館で、そういったものが取れるかどうかです。先ほど事業実施計画でご説明させていただいた、アイヌ民族文化研究センターの情報発信を強化することでいただいている予算のなかで、当館のホームページのアイヌ文化関係の情報については、今年と来年にかけて、リニューアルしていきたいと考えています。そのなかで、たとえば過去のものもさかのぼって載せていけるかどうかというあたりは、博物館として、一体的な形で整備できればと考えております。

《質疑応答5 アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』について》

佐々木委員：アイヌ民族文化研究センターの事業ですけれども、こちらも非常にレベルの高い活動をされていまして、私どもも参考にしながら、国立アイヌ民族博物館の事業を考えています。資料の18ページにあります、「アイヌ文化紹介小冊子」ですけれども、名前だけ見ますと、アイヌ民族文化財団が出している、いろいろな『アイヌ生活文化マニュアル』などの、一連の近い本があるのですけれども、あのようなものと、どういう形で差異化しているのでしょうか。これから国立アイヌ民族博物館としても、こういったアイヌ文化の基本的な紹介をしていかなければいけないのですが、では国として紹介していくものと、道の博物館として紹介していくものと、どう棲み分けていくのか。同じことをやっても、バッティングしてしまいますので、そのあたり、どういうお考えなのかを聞きたいです。

国立アイヌ民族博物館準備室も、現時点で方針があるわけではないのですけれども、道のお考えを伺いながら、我々のできることを、あるいは個別にできることと、一緒にやっていくことを、一緒に考えていくことができればと思っていることから、どういう形で、こういうものを用意していらっしゃるのかを、伺いたいです。

小川学芸副館長：「アイヌ文化紹介小冊子」の既存のものとの差別化という話でしたが、私どもの「アイヌ文化紹介小冊子」、テーマ別に9冊、各32ページございます。アイヌ民族文化財団を含めて、いろいろなところがアイヌ文化の概説的なパンフレットを出していらっしゃいますけれども、これだけのボリュームでのパンフレットは、似たものがあるとすると、アイヌ民族博物館監修の『アイヌ文化の基礎知識』ぐらいです。これだけのボリュームを持った、アイヌ文化に関する情報冊子は他にないだろうと考えておりますので、今のところ、何かとの棲み分けはあまり考えていません。先ほど言及のあった『アイヌ生活文化再現マニュアル』は、アイヌ文化の基本的な知識を提供するというより、むしろある具体的なモノや事柄、儀式に即して、ハウツー的なところを、しかも個別の伝承者の方がどんな記憶を持っていらっしゃるかということに関わってご紹介するものなので、おのずと中身が違っているのかと思います。「アイヌ文化紹介小冊子」に関しては、ある意味では学術的な正確性をもって、アイヌ民族の伝統的な文化の基本的なところと、それから学校教育を含めて使っていただくときに必要な参考になる文献・施設の情報を、あわせて載せています。

基本的なアイヌ文化の情報に関してはあまり変わらないけれども、参考文献の情報に関しては、絶えずアップデートして新しい情報を足していくという方針でご提供していくことを考えています。今のところは他に類がないので、このスタンスで継続する必要性が高いと判断しております。

佐々木委員：ありがとうございます。そこまで伺っておけば、国立アイヌ民族博物館として、何をやらなければいけないのか、何をやる必要がないのかが、よくわかります。

《質疑応答6 資料数について》

大原会長：先ほどの資料数ですけれども、「受入資料」は、たとえば昆虫採集などで採って

きたものは入らないのですか。自然史からすると、「300 点」は1日の昆虫採集で取れてしまう数なのです。

舟山学芸部長：実際に、「野幌森林公園植物調査の会」などからいただいた資料は、正確な数は今、把握していませんけれど、300 を超える資料だったと思います。「件数」で出ているものと、「点数」で入っているものがあるものですから、そのあたりの件数・点数の違いの混同になっているということです。

《意見 1 研究紀要のリポジトリ化について》

大原会長：リポジトリですけれども、CiNii（サイニー）という、国が運営しているものがありますので、そういうものを利用すると、博物館としてはほとんどお金を出さずに、登録するだけでできますので、PDF さえできていれば、あとは事務手続きで実施できると思います。学会などは、ほとんどそうしてと思っています。

小川学芸副館長：今、CiNii には入れていただくようにしていますので、過去にさかのぼって、どう載せていくかは、これからまた CiNii を運営している国立情報学研究所にご相談ということになります。

議題（2） 報告事項 2 百年記念施設の継承と活用について

大原会長：続いて、報告事項 2 「百年記念施設の継承と活用について」、ご説明をお願いいたします。

右代学芸主幹：環境生活部文化振興課 佐藤主幹より、ご報告させていただきます。

佐藤主幹：文化振興課の佐藤でございます。どうぞよろしく願いいたします。

道立の自然公園、野幌森林公園でございます、北海道博物館、北海道開拓の村、それから百年記念塔の3つをあわせて、「百年記念施設」と総称しております。これらは、いずれも昭和 40 年代の北海道百年記念事業の一環で整備がなされたものです。これらの施設が開設から約 50 年経ちまして、施設の老朽化や、開設時に比較して利用者数の減少等の課題が発生しております。このことから、道では、今年が北海道命名 150 年の節目の年でもあることから、これらの施設を、次の世代にどのように引き継ぐべきかの検討を行っております。

そこで、本日、私どもがうかがいました主旨は、これらに関します、これまでの経緯、それから昨年 11 月に取りまとめました、今後の議論の方向性を示す、「百年記念施設の継承と活用の考え方」の説明・内容、さらに現在の取り組み状況や今後の進め方等についてご報告させていただくとともに、これらに関しまして、協議会の委員であります皆様から、専門家としてのご視点からのご意見を伺いたいと考えております。

報告する時期が遅れまして、たいへん申し訳ございません。本日はよろしく願いいたします。

〈以下、配布資料 3 に基づいて説明〉

大原会長：ありがとうございます。この周辺のエリアの「50年後、100年後」を見越して、ということで、当然、そのなかの、かなり大きな中心として北海道博物館がありますので、周りのエリアがどうなるかによって、北海道博物館もどういう影響を受けるかという、とても大きな課題だと思います。委員の方々から、ぜひご意見をお願いいたします。

《意見1 これまでの総括について（1）》

児島委員：「再生構想」ということですが、要するに「再生」ということは、今、死んでいくということですよ？ そもそも、この「百年記念施設」ができたときの100周年から、この150年までの間の50年をどのように総括しているのかを、はっきりさせていただきたい。「再生」「再生」と仰っていますが、この記念塔をなくしてしまったら、「知らないうちに、百年記念がなくなっている」ということにもなりかねないので、「どうするか」というのは、どのように総括して、次の50年、100年に続けていくのかということになるので、歴史家としては、どのように総括しているのかを、まず示していただきたいです。

大原会長：そうですね。50年先を見たときに、これまでの50年を見ないと、ここから先が見えないというお話だと思います。私も、これから50年先、日本がどうなっているかということを見越した段階で検討してほしいと思います。これまでの50年とは、高度成長の50年でしたから、あのような鉄の塔を建てても維持できると、たぶん思っていたと思います。ですが、ここから先50年、日本はどうなるかを見て、そのときに「このエリアはどう活用できるか」という位置づけだと思いますので、それは歴史的に50年先を考えなければいけないと思います。

《質問1 協議会での議論について》

宇佐美委員：今、「何か言え」と言われても、なかなか言えません。つまり、道庁としても、ここまで全部進めてしまっているわけですよ。そして、既にいろいろな方からもご意見も聞いていて、それで「今年中にまとめるぞ」というところまで来ている段階で、我々協議会の委員に、「意見を言え」と言われても、なかなか言えません。言っても、どのように反映されるのかがよくわからない。少し当惑している感じがあります。これまでの経緯のなかで、その都度ご意見が言える場があればまた別でしょうけれど、「ここまで進んできてしまっている」という感覚が私にはありまして、何をどう言えばいいのかと、少し当惑しております。どこまで、何を言えばいいのでしょうか？

《意見2 「再生」「活発化」に向けた提案（1）》

澤田副会長：導線と言いますか、先日、野幌総合運動公園に行って、北海道博物館のほうに来られるのかと思ったら、行き止まりで来られず、車で全部回れない形になっていました。そのあたりは、やはり、将来的に考えていったほうがいいのかと思います。車で1回行って、それをまた戻って来るのは、本当に面倒で、「それだったら行かないかな」となってしまう

こともあるかと思います。

《意見3 「再生」「活発化」に向けた提案（2）》

大原会長：この森林公園を「再生したい」というか、「もっと活発にしたい」という方向を示さなければならないと思います。50年維持できるかは別として、「当面5年ぐらい」と考えるのであれば、やはりたくさん人が来てくれるところにするということは、とても大切かと思っています。百年記念塔も、「ああ、あそこに野幌があるんだな」と思って遠くから見ることはあるのですが、その下まで来ることは、あまりないのかもしれない。そうすると、実は札幌に旭川から来るときに、札幌の渋滞に入る手前がこのあたりですよね。ですから、塔の下のところ「道の駅」を作ってトイレにすると、みんな駐車場まで入って来て休憩するのではないかと思います。体を動かしたかったら、塔まで歩いて行くのではないかと思います。先ほど、蕎麦を売ったらどうかという話が（説明の中に）ありましたが、道の駅は、トイレと蕎麦とリラックスなので。「道の駅」という名前がいいのかどうかわかりませんが、この100年間を紹介する、ちょっとした入り口展示みたいなものが、駐車場あたりにあるだけでも、博物館に目が向くこともあると思います。「では次に来るときは、博物館まで来ようか」という人の流れを作ること、かなり重要視しても良いかと思っています。あそこに「道の駅」があったら、みんなが止まると思います。札幌の渋滞に入る前にトイレに行きますから。

《意見4 これまでの総括について（2）》

湯浅委員：私は10年前に道民になったので、「いつも電車から見えるあの塔は何だろう？」という思いから始まりまして、とても気になっていました。それで、その50年前につくられた当初のお話などを聞いて、「ああ、そういう意味付けがある塔なんだ」とわかりましたので、児島委員が仰ったように、50年前から今に至る、この50年を総括することは本当に重要だと思います。たとえば大阪万博のときの太陽の塔が、最近またしっかり中が再生されて、岡本太郎さんが込めたあの時の思いというのがフィーチャーされていますけれども、そういうことで、あのエリアが再注目されるようになるということも、例としてあります。ですので、当時の思いと、今の思いと、それから50年先に向ける思いが、つながっているのか、もしくは断絶しているのかわかりませんが、そのあたりを上手にタイムラインに沿って整理されると、アピールするのではないかと感じました。

《意見5 歴史観の総括について（1）》

宇佐美委員：百年記念塔をつくるときに、アイヌ民族の方々からのご意見など、いろいろな議論がありましたよね。そのあたりの話が、どういうふうに総括されているのか。その説明も、今の報告にはなかったのですが、百年記念塔をつくることについては、いろいろ議論があったように記憶していますので、そのあたりの根本的な話をしないと。今あった歴史の総

括にも関わる話ですけれども、そのあたりから話をして、解き起こしていかないと、個別の施設をどうするかという話には、なかなかならないのではないのでしょうか。もちろん、我々は詳しくは聞いていませんけれども、懇談会でもいろいろご議論はあったのでしょうか。けれども、そのあたりから、もう一度、解き起こしていただくのが良いのではないかと思います。

《意見6 これまでの総括について（3）》

澤田副会長：実際に塔が建ってから、いろいろなことがあって、北海道庁爆破事件もありましたし。そういうことから、どうしてそうなったのかを、本当は掘り起こして、きちんと検証していかないと、ほとんど「絵にかいた餅」です。あの塔は50年後になったら、たぶんないと思いますけれども。だから、さきほど太陽の塔の例を湯浅委員が言っていましたけれども、塔があれば、そこに近づいて行きたいですし、登れるなら登ってみたいですね。昔の歴史も、きちんと踏まえてやってもらいたいです。

《意見7 歴史観の総括について（2）》

大原会長：開拓記念館から北海道博物館に名前が変わったことも、とても大きなイベントだったと思います。それによって、だいぶ歴史観にしても、北海道観にしても、変わったと思います。100年と言いますが、100年前にも、当然、北海道はあったわけですから、そういう認識もこの50年間で変わったと思います。ですから、百年記念塔という言い方が本当にいいのかどうかというところを含めて、もう一度、道民を含めての議論が、とても大切だと思います。

《質問2 世論調査について》

児島委員：資料の4ページの一番下から次のページにかけてですけれども、「内閣府の実施した世論調査によれば、本道は、歴史的な建物や遺跡を直接鑑賞した人の割合が全国10ブロックの中で最も低くなっています」と言っています。この内閣府の世論調査とは何かと、調べたのですけれども、わからなかったのが、最低となっている理由がわかりません。理由がわからないと、開拓の村なり、「歴史的な建物や遺跡」をどうしたら見に行こうという気になってもらえるのか、わかりません。この理由が何かは、わかっていらっしゃるのですか？

佐藤主幹：理由については、よくわかりません。

大原会長：本州に比べて、そういうものが北海道は少ないということですかね？

《意見8 歴史観の総括について（3）》

佐々木委員：私は道民になって、まだ2年少ししか経っていないのですけれども、本州にいる人間の目からしまして、北海道の売り方と言いますか、北海道の歴史観・自然観が本州とあまりにもかけ離れすぎてしまっていると思います。本州の人間からすると、北海道に行くというのは、一過性の珍しいところに行くという気持ちはあっても、それで終わってしまう

というところは少し否めないのではないかと思います。つまり、永続的ではない。あるものが好きな人は継続的に来るでしょうけれども、ほとんどの人は少し珍しいものを見て、サッと帰って、あとはそれで終わり。だから、昔だったら、クマの置き物を買って行って、それで終わり。そういうところが、なきにしもあらず。

先ほど児島先生が仰った、「歴史的な建物や遺跡を直接鑑賞したという割合が低い」。これは売り方だと思います。それから、澤田副会長がいる手前で、口幅ったいのですけれども、北海道そのものの歴史観の問題です。やはり先住民族の存在が、あまりにも希薄すぎる。北海道の歴史のなかで、先住民族が北海道の歴史でどういう貢献をして来たか。それから、明治以降の、いわゆる開拓の歴史の中でも、アイヌの人たちが果たした役割は、非常に大きなものがあつたそうです。それが非常に過小化されている。そういうものが、この今の、今までの北海道の歴史のなかにまったく活かされていない。北海道博物館の展示云々の話ではないのですけれども、いわゆる開拓の歴史のコーナーにアイヌの存在がまったくないことは、非常に大きな問題です。アイヌ文化展示はあるけれども、それが北海道の歴史のなかで、完全に浮き上がってしまっている、生きていないというところに、北海道の歴史の振り返りのまずさがあつたのではないかと感じます。そういうあたりも含めて、国立アイヌ民族博物館でどのように歴史を展示するかは、大問題ではあります。私も責任をもって、自信をもって言えるというわけではないのですけれども、そのあたりは十分気を付けないといけません。北海道という土地は、やがて何万年と続きますから、その歴史のなかで、今のところでの150年、あるいは次の50年のこれからの歴史が、どういう位置づけかということは、かなり大きいと思います。今までの皆様の意見とほぼ一緒ですけれども、この50年の総括をどうするかというところが、一番の大きな点であると思います。ただ、この総括というのは、2年や3年の議論でできるものではありませんから、おそらく次の「北海道200年」に向けて、どんどん議論して行って、新たな総括を次々に重ねていくことになるのでしょう。その時に、この北海道博物館の役割は、非常に大きいと思います。

博物館というものは、欧米の博物館に行っていると、歴史が200年、300年……と、単位が違うのです。日本の博物館だとせいぜい50年、東京国立博物館でもせいぜい100年の歴史ではないですか。ロシアに行ったら300年の歴史があります。そういうものを見ていると、この北海道博物館も20年後、30年後は、どうなのか。国立アイヌ民族博物館も2020年にできますけれども、では2120年にはどうなっているのか、2220年にはどうなっているのかを次々に考えていかなければいけない。やはり、北海道もそういう視点で、考えていったほうがいいと思いました。

《意見9 「再生」「活発化」に向けた提案（2）》

大原会長：少し将来のことですけれど、50年経つと、このあたりの木は、とんでもなく大きくなる。今までは開拓のシンボルが、開拓の村であつたり、開拓記念館がある、この野幌だつたと思うのですけれど、50年後はおそらくとんでもない原生林があるのが野幌森林公

園になると思います。そうすると、自然と環境とヒトと共生の塔のような、別のシンボルにしたほうが、おそらく野幌の50年先は良くなるのではないかと思います。もう開拓の歴史は、認識が変わっているのではないかと思います。

《意見10 これまでの総括について》

佐々木委員：大阪の万博記念公園も、できた当時は草地で、見晴らしのいい野原でした。国立民族学博物館ができた当時も、周りは草地で、芝が生えていて、キジがいました。キジがいるということは、やはり草地です。ところが、それから40年経って、もう木が全部育って、鬱蒼とした森になってしましまして、キジがいなくなってしまうました。キジは森には住めませんので。それで、森に特有の生き物が増えました。ハシボソガラスは森をすみかにしますから、カラスばかり増えてしまったのですけれども、それ以外にも、たとえばオオタカが営巣という形で、また新しい自然ができてきています。こういった人工的な公園も、何十年と経っていけば、どんどん自然のものに戻って行って、またその自然をうまく活かした公園設計になってくる。結局、太陽の塔を再生したのも、建設から40年経って、森の様子も変わってしまったところで、少し低迷した日本の状況に、70年代の生き生きした時代を、もう1回復活させたいという、いろいろな思いがあって、あの太陽の塔を復活させることになりました。私が国立民族学博物館に就職した頃は、あの塔は完全に放置された形でした。今から10年ぐらい前から、「そろそろ中を改修して、解放しようか」という話があって、本当は開園30周年記念か何かで、解放する予定だったのですけれども、それに間に合わなくて、結局40年以上経ってから、なんとか公開を始めることになりました。

そういった、その公園のできた当時の議論と、その後どういう経緯をたどって、今の状態になっていて、それをどういう方向に変えて行きたいのかということところは、やはりもっともっと議論して、しかもそれはたとえば150周年で終わりじゃなくて、常に議論を続けていって、進化させていく方向に持っていけないと、おそらくまた廃墟に戻ってしまう。そういう危険があるのではないかと思います。

《意見11 歴史観の総括について》

宇佐美委員：皆様が言っているのはそのとおりですし、大原会長からも、50年後、100年後の、このあたりのことを考えると、というお話がありました。そうすると、さきほど大原会長が仰ったように、開拓記念館が北海道博物館になったように、百年記念塔だけではなくて、開拓の村も「開拓の村」という名前がいいのかどうか、という気も少しします。そういうことも含めて、「将来にわたって、この地域のこの施設をどうするか」という大きな視点を、歴史を踏まえて総括的に考えるべきだと考えます。

大原会長：そうですね。

宇佐美委員：「開拓」という言葉は、今でも抵抗ありますよね？ だから、やはり開拓の村も含めて、少し考えた方がいいのかという気がいたしました。

佐藤主幹：今日はたいへんありがとうございます。また、今後ともよろしく申し上げます。

大原会長：予定よりも、早く進んでいますけれども、他によろしいですか？

委員：(同意)

大原会長：はい。それでは、ただいまのご意見をぜひ果たす形で進んで、構想を練っていたらと思います。博物館の将来がかかっている構想だと思いますので、よろしく願いいたします。

議題（３） 報告事項３ 平成 30 年度北海道立総合博物館協議会スケジュール

大原会長：報告事項３「平成 30 年度北海道立博物館協議会のスケジュールについて」、ご説明をお願いいたします。

右代学芸主幹：それでは、私から説明いたします。

〈以下、資料 4 に基づいて、北海道立博物館協議会のスケジュールについて説明〉

大原会長：はい、ありがとうございます。ただいまの説明について、質問等ございますか。スケジュールについて、よろしいでしょうか。

４ その他

大原会長：続いて「その他」になりますけれども、皆様から何かご意見、ございますか。よろしいですか。

一同：(特になし)

５ 閉会

大原会長：それでは、皆様、今日はいろいろご活発な議論、どうもありがとうございました。これをもって、本日の議事を終了いたします。お疲れさまでした。